

第109回 YWV シニア OB 月例会

旧中山道（軽井沢宿～坂本宿）ウォーキング

・旧碓氷峠見晴台(1,205m)のご案内

幹事：郡司 （4期）

江戸時代の重要な街道の一つであった中山道 69 次のうち、軽井沢宿から坂本宿までの間の旧道を歩きます。この間の碓氷峠は中山道最大の難所として知られ、「天下の険」と呼ばれる険しい急坂の難路でした。今回は軽井沢からの登りに旧碓氷峠遊覧歩道を利用して見晴台(1,205m)へ到達し、旧碓氷峠熊野神社から坂本方面に下り、碓氷峠の森公園交流館峠の湯まで歩いて、日帰り温泉で汗を流します。アクセスには貸切バスを利用します。



〔旧碓氷峠見晴台〕

1. 月 日 : 平成20年9月27日(土)

2. 集 合 : 新宿駅西口 明治安田生命ビル角 7:05 (帝産観光貸切バス出発 7:15)

3. コース : (標高差: 登り 245m、下り 725m) (難易度: ★☆☆)

新宿 7:15 == 碓氷軽井沢 IC == 10:00 JR 軽井沢駅北口 (現地参加者同乗、WC 休憩) == 10:20
旧軽井沢ロータリー(960m) 10:30 → 10:45 遊歩道入口 → 11:00 吊橋 → 11:45 見晴台・
昼食(1205m) 12:30 → 12:35 熊野神社 12:50 → 13:30 山中茶屋跡 → 14:35 碓氷峠関所跡
→ 15:20 中山道口 (国道旧 18 号) → 15:30 峠の湯・入浴・休憩(480m) 16:30 == (碓氷湖・
めがね橋車窓見学) == 松井田妙義 IC == 20:00 新宿 (歩行時間: 約 4 時間)

* 峠の湯出発が予定時刻より遅い場合は、バスによる碓氷湖・めがね橋見学は省略します。

4. 地 図 : 国土地理院地形図 1/25000 軽井沢
(地図付きコースガイド小冊子を、当日参加者全員に配布します。)

5. 立寄り湯 : 碓氷峠の森公園交流館 峠の湯 (Tel: 027-380-4000)

6. 費 用 : 5000 円 (参加費、バス代、入浴料を含む)
(貸切バス利用参加者が 30 名未満の場合は、6000 円になります。)

7. その他 :

- 1) 雨天の場合: (午前) アプトの道散策 ~ (昼食・入浴) 峠の湯 ~ (午後) 富岡製糸場見学。
- 2) 持ち物: 昼食、飲料水、おやつ、雨具(傘)、入浴セット、他
- 3) 履き物: ウォーキングシューズ、またはスニーカーが適しています。
- 4) トイレ: 軽井沢駅、旧軽井沢町営駐車場、軽井沢観光会館 (有料)、二手橋、見晴台、熊野神社前、峠の湯 (全て配布地図に **WC** 表記)

8. 参加申し込み : 9月13日(土) までに各期幹事経由で塚原委員長へ

9. 連絡先 : 前日までは郡司自宅 (Tel: 045-、当日は携帯 (090-))

以上

第109回YWVシニア08月例会
旧中山道(軽井沢宿～坂本宿)ウォーキング
・旧碓氷峠見晴台(1,205m)

1.月 日：平成20年9月27日（土）

2.集 合：JR新宿駅西口 明治安田生命ビル角 7：05（帝産観光貸切バス出発 7：15）

3.コース： [標高差：登り245m, 下り725m]
 新宿7:15 === 碓氷軽井沢IC ==10:00 JR軽井沢駅北口(現地参加者同乗、WC休憩) ==
 10:20 旧軽井沢ロータリー(960m) 10:30 → 10:45 遊歩道入口 → 11:00 吊橋 → 11:45 見晴台
 ・昼食(1205m)12:30 → 12:35 熊野神社12:50 → 13:30 山中茶屋跡 →14:35 碓氷峠関所跡
 →15:20 中山道口(国道旧18号) → 15:30 峠の湯・入浴(480m) 16:30 === 〈碓氷湖・めがね
 橋車窓見学〉 === 松井田妙義IC === 20:00 新宿 (歩行時間：約4時間)

4.立ち寄り湯： 碓氷峠の森公園交流館 峠の湯 (Tel: 027-380-4000)

5.雨天の場合：(午前)アプトの道散策・(昼食・入浴) 峠の湯・(午後) 富岡製糸場見学



旧中山道 坂本より軽井沢之図 (松井田町)

〔軽井沢駅〕

東日本旅客鉄道(JR東日本)と、しなの鉄道の駅。JR東日本では高崎から長野までの長野新幹線の駅であり、篠ノ井までのしなの鉄道では始発駅になっている。駅舎全体は長野新幹線の開業に伴い現在の橋上駅として新築されたもので、旧駅舎はすぐ近くに保存され、(旧)軽井沢駅舎記念館となっている。橋上は南北に繋ぐ自由通路と名付けられた歩道になっており、南側がJR東日本、北側がしなの鉄道の改札口になっている。1888(明治21)年9月に碓氷馬車鉄道が横川駅近くから軽井沢駅地点まで開通したのが歴史の始まりで、以後様々な変遷を経たが、1997年(平成9年)10月1日に長野新幹線(北陸新幹線)が開業。信越本線の碓氷峠区間は廃止され、軽井沢駅～篠ノ井駅間はJR東日本からしなの鉄道に移管された。1日の乗車客はおよそ2,600人。接続する路線バスはJRバス関東、西部高原バス、草軽交通。他に高速バスとも接続している。南口は軽井沢・プリンスショッピングプラザ等が近くに位置し、北口を出ると道路は新軽井沢、旧軽井沢方面へと向かう。

〔(旧)軽井沢駅舎記念館〕

新幹線の開通に伴い取り壊された旧・軽井沢駅舎を再築した建物で、外観は1910(明治43)年の大改築後の姿が再現されている。1階の展示室には、草軽鉄道を含む信越本線当時の鉄道関連の資料が展示されており、2階には歴史記念室として貴賓室が再現されている。貴賓室の大扉とカーテンボックスは旧駅舎取り壊し時に保管しておいたものを補修再使用している。館内には軽井沢観光協会の事務局が設置され、屋外に古い鉄道車輛が4輛展示されている。



(旧)軽井沢駅記念館正面玄関 | アプト式電気機関車EC40(10000形) : 独AEG社製

〔中山道〕(軽井沢宿～碓氷峠)

1602(慶長7)年に徳川家康が制定した五街道の一つで、東海道と並んで江戸時代の重要な道路の一つであった。江戸日本橋から上州を経て信濃に入り、軽井沢宿、沓掛宿、追分宿の浅間三宿を経て近江の守山まで67宿、次の草津で東海道と合流し、京都までの69次であった。江戸開府直後、東海道と共に本格的に開拓されたもので、一里塚や松並木などが整備され、各宿場の中心部には、本陣や脇本陣などの大名らの宿泊所や伝馬を扱う問屋などを定め、一般旅人の旅籠屋、茶屋、伝馬を務める農家などが並んでいた。36丁(約4km)毎に築かれた一里塚は軽井沢には三ヶ所あったが、現在その面影を偲ばせるのは、追分の浅間神社と西部小学校の間にある一里塚のみ。名称は、初めは中仙道であったが、東山道の中筋ということで、1716(享保元)年に中山道と改められた。「五街道宿御取扱秘書」に「中山道只今之迄仙之字書候得共向後山之字可書之」とある。

〔つるや旅館〕

天領であった軽井沢宿は、江戸時代初頭から参勤交代で賑わった。しかし明治に入るとすっかりさびれてしまった。その後避暑地として再生するわけだが、江戸初期に旅籠「鶴屋」として開業された「つるや」は、大正から昭和の中頃まで、一大「文学サロン」の観を呈することになる。

ここで夏を過ごし、執筆した作家は、ざっと挙げただけでも、島崎藤村、正宗白鳥、室生犀星、萩原朔太郎、芥川龍之介、堀辰雄、谷崎潤一郎、志賀直哉、山本有三、石坂洋次郎、丹羽文雄などなど。芋蔓式に集まってきたと言ってもいい。文人墨客だけでなく、政財界の重鎮も定宿としていた。堀辰雄と矢野綾子の出会いの場でもある。

〔芭蕉句碑〕

「芭蕉翁」の文字と「馬をさえながむる 雪の あした哉」とが彫られている。

松尾芭蕉(1644～1694)「野ざらし紀行」(甲子吟行)の中の一句。前書きに「旅人をみる」とある。雪のふりしきる朝方、往来を眺めていると、多くの旅人がさまざまな風をして通っていく。人ばかりでない、駄馬などまでふだんとちがって面白い恰好で通っていくよの意。

(飯野哲二編「芭蕉辞典」による)

碑は1843(天保14)年、当地の俳人、小林玉蓬によって、芭蕉翁150回忌に建てられたものである。
(軽井沢町)

〔ショーハウス記念館〕

1888(明治21)年、避暑地としての軽井沢を見出して広く紹介し、現在の軽井沢の基礎を築いた「軽井沢開発の父」と呼ばれるカナダ生まれの英国聖公会宣教師A.C.ショーが立てた軽井沢別荘の第1号。この建物は、昭和の初めに軽井沢教会敷地内に移築されたが、ショーハウス復元委員会によって1986(昭和61)年に現在の場所に復元され、1996(平成8)年に町が寄贈を受け、一般公開している。外観は日本の民家風だが、内部は洋館の間取りとなっている。日本聖公会ショー記念礼拝堂裏手のカラマツ林の中にひっそりと佇む建物は美しく、軽井沢における初期の洋風別荘を再現している。入館料無料、開館時間は9時～17時(7月～9月は18時まで)、休館日は11月から3月、開館期間中は木曜および祝日の翌日(7月半ばから9月半ばまでは無休)、駐車場3台(無料)

〔日本聖公会ショー記念礼拝堂〕

1985(明治28)年に建設された、軽井沢で最も古い教会で、避暑に訪れた外国人たちの礼拝堂として誕生した。簡素でいて温かみのある木造建築が特徴的。1922(大正11)年に大改修がおこなわれ、現在の姿となった。A.C.ショー氏ゆかりの教会として、聖地軽井沢のイメージを伝え続けている。ショーハウス記念館に隣接し、日中は礼拝時以外は見学可能。今も日曜日には日本聖公会の牧師による礼拝が行われ、建物の前にはショー氏の胸像とショー氏記念碑とがある。

〔ショー師記念碑〕

今日の保健休養地としての軽井沢があるのは、A.C.ショー師のおかげであると言っても過言ではない。カナダ生まれの英国聖公会宣教師、ショー師は1886(明治19)年にキリスト教の布教の途中、軽井沢に立ち寄り、美しい自然と気候が、英国のスコットランドに似ているのに感動し、この地を「屋根のない病院」と呼び絶賛した。その夏、友人とともに避暑に訪れた。翌年も夏を過ごして益々気に入り、保健と勉学の適地として推奨し、翌1888(明治21)年、旧軽井沢の大塚山に簡素な別荘を建てた。これが軽井沢の別荘の最初のもので、今日の観光と保健の地、軽井沢を生む一粒の種となった。この碑は師の功績を讃え、1905(明治38)年5月31日、地元の人々によ

〔旧碓氷峠見晴台〕

旧中山道碓氷峠近く南側にある標高1,205mの展望台。四季を通じ、山の景色を楽しめる。運が良ければ、雲海を見ることができ、別名「サンセットポイント」と呼ばれるだけあって、沈む夕日が美しい。勿論、早起きの人は登る朝日を拝む事ができる。秋の紅葉の紅葉はとても美しい。冬の雪景色は最高だ。雪景色した妙義連山に夕日が当たり、ピンク色に染まる一瞬は筆舌に尽くし難い。長野・群馬県境に位置し、眺望が素晴らしく、離山、浅間山、八ヶ岳などがよく見える。戦国時代には狼煙台であったと言われている。

1919(大正8)年から近藤友衛門が開き、雄大な展望を広く世に紹介するため、1957(昭和32)年に当時ただ一つの町立公園として、軽井沢町に寄贈したもの。展望台駐車場近くに近藤友衛門寄贈の立派な門がある。

〔タゴール記念像〕

アジアで初めてノーベル文学賞を受けた、インドの詩人ラビンドフート・タゴールが、軽井沢を訪れたのは、1916(大正5)年の夏であった。

この詩人は、1861(文久1)年にカルカッタの地主の家に生れ、ラビ(太陽)と名づけられた。父は大聖者と呼ばれた求道の人であり、ときどきラビをヒマラヤの峰につれて行き、宇宙の靈に呼びかけることを教えた。のちにラビは、古代の教育法を求めて、今日のタゴール大学の前身となった森の学校を始めた。1912(大正2)年には、タゴールがみずから英訳した「神への献げ歌」がノーベル文学賞の授賞となった。

その翌年の夏、第一次世界大戦が起こって、ヨーロッパは、互いに憎み殺し合っていた。当時インド綿花の輸入によって、日本は繊維工業の隆盛を得ていたこともあって、国賓としてタゴールを招待した。詩人は、日本人の美と調和を愛する心に感動したが他方、日本軍国主義の台頭にはつよい心配をもち、講演の中で再三警告した。8月には、日本女子大成瀬仁蔵学長の招きで、軽井沢の三井邸に滞在し、毎朝真珠のような詩を女子大生たちに読んで聞かせ、大樅の樹下に座って、祈りの講話をした。

軽井沢は噴火山のないインド亜大陸の詩人に、つぎることのない詩の泉となった。

「神は名もない野の草に、何億年もかけて、一つの花を咲かせ給う」

「大地一面の微笑みを咲かせるのは、天地の涙あればこそだ」

タゴールはその後二回日本を訪れたが、最後の講演では「自己中心の文明は隣の国民を焼きつくす武器を発明するようになる。くれぐれも『人類は戦わず』を守るべきだ」と述べ、原爆を予言するような言葉も残した。1941(昭和16)年8月7日、広島・長崎の原爆投下やインドの独立を知ることなく、たくさんの作品を残して、その80歳の地上の生涯を閉じた。(日本タゴール会稿)
(軽井沢町)

この胸像はタゴールの生誕120年を記念して建立されたもので、背後の壁には彼の言葉「人類不戦」の文字が記されている。

〔万葉集歌碑〕

わが国最古の歌集である万葉集に載っている碓氷峠を詠んだ二首が万葉仮名ではなく、読みやすいように現代語で彫られている。見晴台に自然石を使って1967(昭和42)年に建てられた。「日の暮れに うすい山を こゆる日は せなの袖も さやにふらしつ(巻14)よみ人知らず」
解説：日暮れに碓氷峠を超えてゆく日、家の門でちぎれんばかりに手を振って別れを惜しんで

〔中山道〕(碓氷峠～坂本宿)

碓氷路は、古くはヤマトタケルノミコトが東征の際に利用したと伝えられるように、古代より関東から信州を經由して畿内にいたる東山道の要地であった。その後、徳川期には中山道として整備されて、関所や坂本宿、軽井沢宿がもうけられ旅人、馬子、駕籠、大名行列等で賑わった。

しかし、碓氷峠は中山道最大の難所として知られ、東海道の箱根峠とともに「天下の険」と呼ばれるほどに険しい急坂がつづく難路であったため、1886(明治19)年に中山道は南方に開削された新道に移り、新しい碓氷峠が造られた。第2次世界大戦後は交通量の増大で渋滞が慢性化し、新峠約3km南方の入山峠に碓氷バイパスが建設された。

また、碓氷峠上には松井田、軽井沢両町の氏子が共同で例祭をおこなう熊野神社があり、かつては旅人が道中の安全を祈願したといわれる。

〔旧中山道碓氷峠道跡〕

江戸時代五街道の1つ。江戸から上野、信濃、美濃を経て東海道に合する。この谷間の道が五街道の1つ中山道で坂本宿を経て峠に至り軽井沢宿への入り口になっていた。この道の険しさを旅人は、「旅人の身を粉に砕く難所道 石のうすいの峠なりとて」「苦しくも峠を越せば花の里みんな揃って身は軽井沢」と唄っていた。峠の頂上には道中安全の神、熊野権現が祀られている。

現在の道(舗装路)は明治天皇巡幸道で、1878(明治11)年に改修された道である。

(軽井沢町教育委員会)(軽井沢町文化財審議委員会)

〔碓氷峠の力餅〕

中山道最大の難所である碓氷峠を越える旅人が道中安全を願い熊野神社にお参りした際、護符として餅が授与された事が力餅の始まりと伝えられる。また、「碓氷貞光の力餅」とも呼ばれる。碓氷貞光は、源頼光の家来の四天王(他:坂田公時、卜部季武、渡辺綱)の一人で、熊野神社の社家に生れたと伝えられる。貞光は文武両道に秀で、世の人々の為に尽くした功績は著しく、人々から「碓氷峠の力持ち」と呼ばれた。この貞光の人徳にあやかろうとその名がついたと言われる。

名物の力餅には、あんこ、きなこ、ごま、くるみ、納豆、大根おろしなどの種類があり、峠にある6軒の茶店、碓氷山荘、みすゞや、しげの屋、いづみや、見晴亭、あづまやで食べられる。

〔安政遠足(とおあし) 侍マラソン〕

この遠足の歴史は古く、1855(安政2)年に当時の安中藩主「板倉 勝明」公が、藩士の鍛錬のために碓氷峠の熊野権現まで7里余りの中山道を徒歩競走をさせ、その着順を記録させたことが始まりで、日本最初のマラソン大会という。昭和30年に、このときの記録が峠の茶屋から発見された。その後、安政遠足保存会が組織され、現在の「安政遠足」が開催されるようになった。

毎年5月の第2日曜日に開催される行事で、毎回たくさんの仮装したランナーが走る。

参加者は午前8時に市長が叩く大太鼓を合図に安中城址(安中市文化センター)をスタートし、関所コース(20.35km)、峠コース(29.17km)を走り、関所コースは碓氷峠の森公園隣のくつろぎの里がゴールであるが、峠コースは熊野神社がゴールになっている。

〔熊野神社〕

碓氷峠に位置する神社。社殿は群馬県と長野県の両県にまたがっており、参道と本宮の中央が国境にあたる。かつては長倉神社熊野宮。または長倉山熊野大権現と称したが、社地が信濃。

頒布されている。

・歴史大略

鎌倉時代に武士団等の篤い信仰を受け、群馬県最古の吊鐘(県重文)が松井田より奉納されている。江戸時代には諸大名を始め、多くの人々が中山道を行き来した。関東の西端に位置し、西方浄土、二世安楽、道中安全を叶える山岳聖地として、権現信仰が最も盛んとなった。

「碓氷峠の権現様は 主の為には 守り神」と旅人に唱われ、追分節の元唄となって熊野信仰が全国に伝わって行った。
(碓氷峠熊野神社社務所)

〔山口誓子の句碑〕

「剛直の 冬の妙義を 引寄せる 誓子

解説：神社や見晴台から何処までも見える冬景色と眼前に見る妙義と厳しい寒さを見事に詠んでいる。1975(昭和50)年に建てられた。

〔石の風車〕

1688(元禄元)年建立。軽井沢宿の問屋佐藤市右衛門及び代官佐藤平八郎の両人が二世安楽祈願のため、熊野神社正面石畳を1657(明暦3)年に築造した。その記念に、その子市右衛門が佐藤家の紋章源氏車を刻んで奉納したものである。秋から冬にかけて吹く風の強いところから中山道往來の旅人が石の風車として親しみ、「碓氷峠のあの風車 たれを待つやら くるくると」と追分節に唄われて有名になった。軽井沢町指定文化財

(軽井沢町教育委員会)(軽井沢町文化財審議委員会)

〔杉浦翠子歌碑〕

1967(昭和42)年、門下生(藤波会)によって建てられ、「のぼる陽は 浅間の雲を はらひつつ 天地霊あり あかつきの光」翠子 と刻まれている。軽井沢の自然を詠んだ傑作とのこと。

解説：昇る朝日が浅間山に掛かる雲を払い除け、まさに天地に霊が満ち満ちている。

〔熊野神社のシナノキ〕

樹齢800余年と伝えられている。信濃には、この木が多く一説には、「信濃は科野なり」ともいわれる。シナノキは、日本特産の山地に生える落葉高木で、樹皮は繊維が強いので布・縄などの料に用いられた。シナは「結ぶ・縛る・括る」という意味のアイヌ語からきたものである。1991(平成3)年8月15日に長野県の天然記念物に指定された。

(軽井沢町教育委員会)(軽井沢町文化財審議委員会)

〔水の分去れ〕

水の分去れ(中央分水嶺)とは、この地点に降った雨水が長野県側は千曲川から信濃川水系で日本海へ、群馬県側は碓氷川、烏川から利根川水系で太平洋へと異なる方向に流れる境界。

〔史蹟 赤門屋敷跡〕

江戸幕府は諸大名を江戸に参勤させた。この制度の確立の為「中山道」が碓氷峠「熊野神社」前を通り、此の赤門屋敷跡には「加賀藩前田家」の御守殿門を倣って造られた朱塗りの門があった。諸大名が参勤交代で浅間根腰の三宿「追分・沓掛・軽井沢」を経て碓氷峠に、また上州側坂本宿より碓氷峠に到着すると、熊野神社に道中安全祈願詣でを済ませて、此の赤門屋敷で暫しのほど休息し、無事碓氷峠まで来た事を知らせる早飛脚を国許また江戸屋敷へと走らせた。江戸時代の終り文久元年(1861)仁孝天皇内親王和宮様御降嫁の節も此の赤門屋敷に御休息された。

明治11年(1878)明治天皇が北陸東山道御巡幸のみぎり、峠越えされた行列を最後に、旅人は

別名「日本武尊をしのぶ歌碑」と言う。「ありし代に かへりみしてふ 碓氷山 いまも恋しき 吾妻路のそら」と彫られている。群馬県室田の国学者、関橋守の作で、日本武尊が妻を恋い偲んだことを詠んだものと言われている。1857(安政4)年建立。

〔仁王門跡〕

もとの神宮寺の入口にあり、元禄年間再建されたが、明治維新の廃仏毀釈によって廃棄された。神宮寺は、日本において神仏習合思想に基づいて神社を実質的に運営していた仏教寺院である。

わが国に仏教が伝来した飛鳥時代には、神道と仏教はまだ統合される事はなかったが、平安時代になり、仏教が一般にも浸透し始めると、日本古来の宗教である神道との軋轢が生じ、そこから神は仏の仮の姿であるとする神仏習合思想が生まれ、寺院の中で仏の仮の姿である神(権現)を祀る神社が営まれるようになった。

鎌倉時代、室町時代、江戸時代では、武家の守護神である八幡神自体が「八幡大菩薩」と称されるように神仏習合によるものであったため、幕府や地方領主により保護され、祈禱寺として栄えた。

現在、仁王様は熊野神社の神楽殿に保存されている。

〔和宮道〕

「和宮道」と言うのは幕末の1861(文久1)年、皇女・和宮が徳川家茂に降嫁することになり、京から江戸へ中山道を下られた。その時、中山道の各宿場や街道の設備を大々的に整備した。中山道の旧道を辿ると、各地でこのような所にぶつかる。この和宮道もそのひとつで、当時の碓氷峠は道が険しく荒れていたため、新たに多少平易な別ルートを開いたものである。

なお、約3万人の和宮一行は同年11月9日(1861年12月10日)に軽井沢を発って碓氷峠を越え、翌10日(1861年12月11日)に横川へ宿泊している。

〔長坂道〕

中山道をしのぶ古い道である

案内板には上記の記載のみで不詳であるが、1602(慶長7)年に中山道として整備された碓氷坂の道の長い下り坂の部分を長坂道と表示したものと考えられる。

〔人馬施行所跡〕

笹沢のほとりに、文政11年、江戸呉服の与兵衛が、安中藩から間口十七間、奥行二十間を借りて往来の人馬が喉を潤すための休む家を作った。道中一の水量を誇る水場跡である。

〔化粧水跡〕

峠町へ登る旅人が、この水で姿、形を直した水場である。

〔陣馬が原〕

太平記に新田方と足利方のうすい峠の合戦が記され、戦国時代、武田方と上杉方のうすい峠合戦記がある。笹沢から子持山の間は萱野原でここが古戦場といわれている。

〔子持山〕

万葉集巻14東歌中 読人不知

児持山 若かへるての もみつまで 寝もと我は思う 汝はあどか思ふ (3494)

口語訳：子持山の 楓の若葉が 紅葉するまでも ずっと寝ようとわたしは思う

おまえはどう思うかい

②1 〔一つ家跡〕

ここに老婆がいて、旅人を苦しめたと言われている。

山中茶屋の入口に線刻の馬頭観音がある。これから、まごめ坂といって赤土のだらだら下りの道となる。鳥が鳴き、林の美しさが感じられる。

②⑥ 〔栗が原〕

明治天皇御巡行道路と中山道の分かれる場所で、明治8年群馬県最初の「見回り方屯所」があった。これが交番のはじまりである。

②⑦ 〔座頭ころがし(釜場)〕

急な坂道となり、岩や小石がごろごろしている。それから赤土となり、湿っているのですべりやすい所である。

②⑧ 〔一里塚〕

座頭ころがしの坂を下ったところに、慶長以前の旧道(東山道)がある。ここから昔は登っていった。その途中に小山を切り開き「一里塚」がつくられている。

一里塚は、36町ごとに道の両側に5間四方の大きさに設けられ、榎などが植えられて、休憩の場として、駕籠や馬を利用する旅人には里程計算の目安になり、駄賃勘定に便を与えた。

②⑨ 〔北向馬頭観音〕

馬頭観世音のあるところは危険な場所である。一里塚の入口から下ると、ここに馬頭観世音が岩の上に立っている。(高さ142cmの像塔)

観音菩薩

文化15年4月吉日

信州善光寺

施主 内山庄左衛門 上田庄助

坂本世話人 三沢屋清助

③⑩ 〔南向馬頭観音〕

この切り通しを南に出た途端に南側が絶壁となる。昔、この付近は山賊が出たところと言われ、この険しい場所をすぎると、左手が岩場となり、そこにまた馬頭観音が道端にある。

(高さ65cmの像塔)

寛政3年12月19日

坂本宿 施主七之助

③⑪ 〔掘り切り跡〕

天正18年(1590)豊臣秀吉の小田原攻めで、北陸・信州軍を、松井田城主大導寺駿河守が防戦しようとした場所で、道は狭く両側が掘り切られている。

③⑫ 〔碓氷坂の関所跡〕

昌泰2年(899)碓氷の坂に関所を設けたといわれる場所と思われる。

江戸時代の元和2年(1616)に安中城主「伊井直勝」が幕命により守護代となり、「入り鉄砲に出女」取締のため横川に移された。

③⑬ 〔刎石茶屋跡(四軒茶屋跡)〕

刎石山の頂上で、昔ここに四軒の茶屋があった屋敷跡である。今でも杉林の中に石垣と平な屋敷跡が残っている。(力餅、わらび餅などが名物であった。)

③⑭ 〔弘法の井戸〕

諸国をまわっていた弘法大師が、刎石茶屋に水がないのを憐れみ、ここに井戸を掘れば水が湧き出すと教えられ、水不足に悩む村人は大いに喜び「弘法の井戸」と名付けたと伝えられている霊水である。

③⑮ 〔風穴〕

刎石溶岩のさけめから、水蒸気で湿った風が吹き出している穴が数カ所ある。

〔覗〕

さんで定附同心の住宅が二軒あった。関門は両方の谷がせまっている場所をさらに掘り切って道幅だけとした場所に設置された。現在でも門の土台石やその地形が石垣と共に残されている。江戸時代に、関所破りを取り締まった番所の跡である。

〔坂本宿〕

中山道69次のうち江戸から数えて17番目の宿場。坂本宿が出来たのは参勤交代に伴い碓氷峠の登り口に宿場が必要となった三代將軍徳川家光の時代、寛永2年(1625)に付近の住民を移住させ、幅員8間1尺(14.85m)・延長392間(713m)の道路を造成し中央には用水路を設置した。京都寄りと江戸寄りの両はずれに上木戸、下木戸が作られた。下の写真は下木戸と称せられ当時の設置場に一部復元したものである。木戸は軍事上の目的のため開閉は、明け六ツ(現在の午前6時)までであった。暮れ六ツ(現在の午後6時)までであった。

文久元年の英泉浮世絵によると、道路に用水路(約1.3m)の用水が中央にあり、その両側に陣に旅籠、商家140軒がそれぞれ屋号看板を掲げ、その賑わいぶりは、次の馬子唄からもうかがえる。

「雨が降りやこそ松井田泊り降らにや越し



〔遊歩道アプトの道〕

アプトの道は、平成9年(1997)10月長野新幹線開通による廃線となるまで明治26年(1893)から104年の歴史を刻んだ碓氷線(信越本線横川～軽井沢間)の横川からめがね橋まで4.7kmの散策ができる遊歩道である。

アプトの道は全長アスファルト舗装されているが、丸山変電所～峠の湯の間は照明が点灯しているので、当日雨天の場合ウォーキングを止め、代わりに傘をさして峠の湯までアプトの道を往復4.2km歩きます。



横川駅隣の碓氷峠鉄道文化むら～丸山変電所～峠の湯の2.6kmは遊歩道と並行して、鉄道文化むらのアトラクションでトロッコ列車シェルパくんが土曜、日曜、祝日、夏休みに運行中です。

信越本線は、明治時代に養蚕先進地帯であった東信・北信地方で生産された生糸を輸出するため横浜港へと運ぶ主要ルートとして、碓氷峠を越える鉄道が建設された。一方、中央線がわが国最大の器械製糸の町となる諏訪・岡谷まで開通したのは明治38年(1905)で、碓氷線が開通してから13年も後のことである。

横川駅と軽井沢駅の間は、水平距離9.2kmに対して標高差553mで平均勾配が60.1パーミルあり、当時の鉄道の通過可能限度勾配のおよそ50パーミルを越えていた。このため、その比類ない急勾配を克服するために導入されたのが、機関車の下に取り付けた歯車を、2本のレールの間に取り付けたギザギザのついたもう1本のレールに噛み合わせて登っていく、「アプト式」と呼ばれる方法である。アプト式は、当時、ドイツのハルツ山に敷設された登山鉄道ですでに実績があり、ドイツから輸入したアプト式の蒸気機関車により、碓氷線の運転が始まった。

開通後は順調に輸送量が増加したが、平均速度が時速10kmに未達な蒸気機関車の遅い

- ・効能：神経痛、冷え性、やけど、疲労回復、美肌
- ・設備：大広間、食事処、売店、個室(3時間3000円)、リラクゼーションルーム、カラオケルーム

〔碓氷湖〕

碓氷湖は、利根川水系烏川の支流・碓氷川に建設された坂本ダムによって形成される人造湖であり、新緑や紅葉の時期には素晴らしい景観を醸し出して観光名所となっている。

坂本ダムは本来、昭和32年(1957)に建設省による砂防事業の一環による砂防ダムとして建設されたもので、当初の堤高は28.5m、堤頂長は74.0mであった。昭和53年(1978)より1年間掛けて改修・補強工事が行われ、堤高を3mかさ上げした。その後も老朽化が進行したこと、根本的な施設改修と碓氷川流域への既得農業用水取水のための流量確保(不特定利水)を図るため、群馬県は昭和60年(1985)よりダムをさらにかさ上げして砂防ダムから通常のダムへと改築する坂本ダム再開事業を実施。9年の歳月を掛け平成6年(1994)に完成させた。碓氷川の正常な流水機能の維持という不特定利水のみを目的とするダムは全国的にも珍しい。

ダム改築と同時に碓氷湖の周辺整備も行われ、湖岸を一周する1.2kmの遊歩道や駐車場の整備、坂本ダム上の橋や湖を渡る橋梁の整備を行った。特に橋梁については碓氷鉄道施設遺産群に配慮して明治風のデザインを採用している。

〔碓氷第三橋梁(めがね橋)〕

国指定重要文化財 碓氷峠鉄道施設 平成5年8月17日 指定

高崎～横川間は明治18年(1885)10月、軽井沢～直江津間は同21年にそれぞれ開業しましたが、碓氷線と呼ばれた横川～軽井沢間は、碓氷峠が急勾配のため、路線決定に紆余曲折し、明治26年(1893)4月開業となり、高崎～直江津間の全線が開業しました。

横川～軽井沢間の11.2kmは、1000分の66.7という最急勾配のため、ドイツの山岳鉄道で実用化されていた、アプト(=アプト)式が採用され、昭和38年(1963)まで走り続けました。

この碓氷線には、当時の土木技術の粋を集めて、26のトンネルと18の橋梁が造られましたが、現存しているなかでもこの碓氷第三橋梁は200万個のレンガで造られ、国内でも他に類を見ない最大な物です。

(文化庁)(松井田町教育委員会)

設計者は、パウネル建築師長(イギリス人)と古川晴一鉄道院技師。橋は径間18.3mの4連型

アーチで、基面から谷底までの深さ31.4m、橋の欄長91.1m、日本最大のレンガアーチである。平成19年(2007)1月、文化庁が選定するユネスコの世界文化遺産暫定リストに「富岡製糸場と絹産業遺産群」が新たに選ばれ、碓氷峠鉄道施設はその構成要件の一つに入っている。

【参考資料】

1. 軽井沢町商工会：軽井沢事典 (<http://shokokai.karuizawa.nagano.jp/ziten/>)
2. 碓氷峠熊野神社 HP (<http://www.geocities.jp/kumanogongenn/>)
3. 小川ゼミの部屋：軽井沢文学散歩(<http://masayoko.at.infoseek.co.jp/sanpo/karuizawa01.htm>)
4. 安中市産業部商工観光課：旧道日和(旧中山道碓氷峠越え道)パンフレット
5. 安中市松井田町編：松井田町史(第7節 交通・運輸 1.中山道と宿駅)
6. 安中市産業部商工観光課：碓氷峠を歩こう(遊歩道アプトの道とその周辺)パンフレット
7. JR東日本 駅からハイキング(横川駅)：碓氷峠アプト旧線ハイキング
(http://www.jres.jp/jres/eki_hiking/yokokawa/yokokawa.html)
8. 信越線横川駅：鉄道遺産碓氷峠 (<http://www.jreast.co.jp/takasaki/area/sinetu/index.html>)
9. 佐滝剛弘：日本のシルクロード(富岡製糸場と絹産業遺産群) 中公新書ラクレ257
10. 碓氷峠の森公園交流館 峠の湯 HP (<http://www.usuitouge.com/tougenoyu/>)



木曾海道六拾九次之内 輕井澤 (広重画)



木曾海道六拾九次之内 坂本 (英泉画)

